

役 割 と 演 技

— 演劇モデルによる行為理解 (2) —

小 松 恵 一

(1991年10月31日受付)

1 はじめに

— 役割という概念 —

一般的に、問題の事象にどのような態度で臨むかということが、その問題にたいする見通しを規定し、さらに、理論構成をもある程度決定するといえるだろう。われわれの取り扱おうとする事象は、複雑多岐を極めるこの社会的現実におけるさまざまな行為である。われわれは、そこに「役割」という概念をもって接近しようとする。その場合、周到な準備的考察を経たうえで、その概念が選び取られているわけではない。その有効性については、むしろ、論述の過程のなかで明らかにされてゆくことになる。しかし、暫定的に「役割」という概念を特徴づけておくことは、無用ではないであろう。

行為を、その行為の主体が担っている「役割」から理解するとは、どのような意味を含んでいるだろうか。

たとえば、わたしが行う個々の行為の一部は、「教師」という役割によって概括される。講義中に、学生に質問する。その行為は、教師という役割遂行の一環であるとみなすことができる。質問された学生は、たいていの場合、自分が何故問いをなげかけられるのかということについて疑義をもたないであろうし、その質問にたいして答えるよう努めるべきである、と考えているだろう。

そうした見方が成立するためには、何よりもまず、わたしが、ある制度的な枠組みのなかで、ある特定の立場にいるという前提があり、その

立場が、自己によって認知されていると同時に、他者によっても承認されていることが必要である。そのとき、「役割」とは、たんに教師という一個人を示すだけの概念ではなく、同時に他者とのかかわりのなかで、自己の位置と役目を明らかにする関係概念である。しかも、その場合、二者のあいだで、ある種の規範が共有されているという事態を意味している。

教師の役目というものは、もちろんいま述べた行為には限定されず、多種多様な行為類型をもっているだろう。そこには、やはりそれぞれの行為についてある規範が成立していると考えることができる。わたしが教師であるとは、そうしたさまざまな規範にしたがった行為を遂行しているという事態を意味している。したがって、「役割」という概念は、ある状況にある諸個人の相互的な関係において、個人の行為がしたがっている規範を集合的に表現するものである、といえるだろう⁽¹⁾。

しかし、そうなると、「役割」概念は、社会的規範に還元され、いわば余分な概念となってしまふことにならないであろうか。「役割」について特別に言い立てることはせずに、規則という概念を中心におこうとする有力な立場がある。それは、われわれがしたがっている「規則」あるいは「規範」の体系として、社会を把握しようとする見方である。たとえば、ヴィットゲンシュタインの「言語ゲーム」(language-game)という発想を援用して、社会科学的な認識を基礎づけようとする試みがある⁽²⁾。

(1)

「言語ゲーム」は、規則とそれを適用する活動をまとめて表示する概念である。その際、規則適用の主体が、あらかじめ措定されているわけではない。ヴィットゲンシュタインは、むしろ、われわれの営む言語ゲームを記述するという作業をとおして、私的言語の議論からもわかるように、規則ないし規範の公共性を強調し、それによってこそ私的体験の意味を理解できるとする。われわれの行為は、ある種の規則の集合体のなかに位置づけられてはじめて意味を獲得するが、その個別的なゲームの複雑な渦巻きとして社会を把握しようという発想である。つまり、人間の行為は、社会的規則の体系的な枠組みにもとづいて理解されることになる。そこでは、社会を構成している諸個人よりも、規則の構造が第一義的である。それは、うなづける発想であって、社会は、その構成要素としての個人の集合体として成り立っていることはたしかであるが、しかし、個人に還元できない構造をもつ、と考えられるからである⁽³⁾。

それでは、個別的ゲームを想定し、その多様なゲーム複合体として社会を理解しようとする発想は、「役割」によって把握するという方向と、どのように異なっているのであろうか。

ひとつには、ある規則にしたがう行為をなす主体にかんして、その捉えかたの相違があるだろう。「役割」は、すでにしてある行為のタイプを示すものであるが、それと同時に、その行為を遂行する主体をも名指している、と考えることができる。規則の適用の主体が、「役割」によって、はじめから名指されているのである。そうであるとするならば、「役割」概念とは、まえに述べられたように、その規範との関係を考慮に入れるとき、規則とそれを適用する活動の主体とを同時に示すものである、と理解できよう。「役割」とは、言語ゲーム複合体としての社会と個人との関係をすでにそのうちに含む概念である。

ある言葉は、ゲームのなかの役割によってその意味を得ているのと同じように、人間社会において一種単位と考えられる個人も、その役割

によって行為し、社会において意味ある位置を占めている。規則だけに焦点をあてるのではなく、その規則と、それを適用する人間の両者に焦点を当てる際に、「役割」という概念が必要となってくる、といえるだろう。

したがって、役割を問題とするときには、必然的に規則の主体としての「自己」が問われてくることになる。ただ、この場合、「自己」を問題にする仕方は、「役割」という概念によってある方向がすでに前提されている、といえよう。つまり、役割とは、たとえば、教師が学生と離れては意味をもたないように、関係を表現する概念である。そこからすれば、自己を実体化する見方は、はじめから拒否されている。むしろ、そこにこそ、個人と社会構造とを連結する概念として、役割概念が有効である所以があると考えられるのである。

このような発想は、「言語ゲーム」という概念と矛盾するものではない。むしろ、「役割」とは、ある言語ゲームを言語ゲームとして名指す概念であるといえるのではないだろうか。つまり、そこには、同じ事象を見るとき、アスペクトの相違がある。それが両者の相違として挙げるべき第二のポイントであろう。さきほど述べたように、「役割」が多種多様な規範の集合体であるとするならば、そのとき、ある役割関係を想定するということは、ある言語ゲームないし言語ゲーム集合体を示すことにほかならないのである。

そうであるとするならば、「言語ゲーム」に類比して、「役割遂行ゲーム」(role-playing-game)あるいは「役割関係ゲーム」(role-relation-game)という概念が可能ではないか。後者は、前者の規則とその適用に構造に焦点をあてる発想を保持しながら、その規則適用の作用性としての「ひと」(person)を考察の範囲におさめた概念である。

この論稿は、「役割遂行ゲーム」という概念を完全に展開するまでにはいたらない。ここでは、「役割」概念をひとつのキーワードとして、わたしが、現在の段階で何を構想しているのか、

その概略を示すとともに、その概念にたいする代表的な批判に暫定的に答えることにある。

2 「役割と自己」再考

さて、演劇モデルは、人間の行為の構造を解明しようとする際に用いられるものであるが、その探求の方向には2つの相がある。

演劇という比喩をそのまま延長していうならば、ひとつは、舞台上で俳優によって行われている演技、俳優どうしのやりとり、そのコミュニケーションの形態に注目する立場である。舞台上では、俳優たちはそれぞれの役割を演じ、そこにある人間関係が構成されてくることになる。この立場に立つ演劇モデルは、俳優たちの演ずる役割とその諸関係を分析することによって、人間の行為の根本構造を取り出そうとする。こういう立場から相互行為、社会構造を論じているのは、たとえば社会学におけるいわゆる役割理論であるが、ここで念頭においているのは、演劇的アプローチを強調するゴフマンである。

一方、舞台上での役割演技に定位するというよりは、より大きな構図、つまり劇場の全体的ありかたを焦点に取り上げる立場がある。それは、劇場的アプローチとでも呼ばれるべきものであるが、そこでは、劇場の観客が、舞台上で演じられる人間関係の諸相をどのように理解するかという問題が問われる。つまり、実際に行為する人間と、その行為を理解する人間という二つの違う観点が設定され、それぞれの関係と両者の相違とが論究されるのである。この立場は、「理論と実践」という問題領域に密接に関連することになるし、また、アーレントのように、両者をギリシャにまでさかのぼる二つの概念、つまり「活動的生活」(vita activa)と「観照的生活」(vita contemplativa)として把握し、その両者の関係の布置の変化から西洋思想史全体を裁断する試みもある⁽⁴⁾。しかし、ここで念頭にあるのは、L. W. ベックの『行為者と観察者』という著作である⁽⁵⁾。ベックは、他者の行為の意味はどのようにして理解されるの

かという問題を扱い、一般的に言えば、他者認識の構造を解明することを目指し、ひいてはそのことによって、社会科学一般の基礎理論が導かれるという期待を抱いている。

つまり、以上演劇モデルにおける2つの相は、社会科学の理論そのものと、社会科学一般の可能性を論ずる基礎理論とに相当する、といっていだらう。

「演劇モデルによる行為論(1)」⁽⁶⁾では、この二つの立場のうち、もっぱら前者の役割理論、特にゴフマンの演劇的アプローチを取り上げ、その自己理解を問題とした。そこで明らかになった自己の姿は、社会的役割の多元的な網の目のなかで、一か所に止まらずに、そのなかを自在に横断している流動的な存在であった。ある人間が担う多様な役割は相互に相対的であって、ある役割に固定されていないところに、人間が自己を相対化する地点、いわば自由であるということの根拠が求められる。人間は、多様な役割を引き受け、その役割に即して行為してゆくことをとおして、役割の集合体として見出されてくるような存在である。こういう発想からすれば、ある人間の性格やパーソナリティといったものも、役割集合体それぞれの微妙な相違であると考えられることになる。

そこには、近代哲学が、たとえばカントが析出したような道德の主体としての自律的個人を見出すことはできない。役割という概念の枠組を使っているならば、カントにおいては、道德律にしたがうという役割が絶対的な地位を占め、その他の役割とは次元を異にしている、ということが出来るだろう。その第一義的な役割にかかわることなしには、人間の人間たる所以である人格は構成されないのである。

このカントの立場では、道德律にかかわることなしには、たとえば道德的反省は不可能である。反省という行為は、「わたし」が「わたし」について考えるという再帰的關係であり、その両者の「わたし」をどのように把握するかという問題は、自己意識にまつわるさまざまな難問

を生み出してきたし、それは、カント以降のドイツ観念論を展開させる推進力ともなったものであった。カントにおいて、道德の場面での自己意識は、道德律に一体化する「わたし」と、現実の現象世界における「わたし」との二元的関係から可能となる。つまり、そこでは「わたし」の内部に二重性が設定されることにより、現実の自己を一種の他者として相対化することができるのである。しかも、その二重性の一方が、道德律という絶対的な引照点であることによって、現実の「わたし」を含む、その他のすべての現実が相対化され、自由という次元が開示されることになる⁽⁷⁾。

役割関係の多元性という発想からすれば、ひとつの固定的で絶対的な引照点は存在しない。そのとき反省とは、担われる数多くの役割のひとつに身を置きながら、その地点から他の役割の意味を量るという操作のことである。こうした反省によって構成されるのは、社会関係全体から独立した自由を確保している主体ではない。個人は、社会的役割を引き受けるというかたちでしか存在することはできず、社会関係のなかにあくまで浸されており、そこから抜け出すことは不可能である。そのとき、自由を語りうるとするなら、それは、いまのべたように、ある特定の関係にたいしては、別の関係からしてそれを相対化あるいは対自化してゆき、距離を取ることができる、そういう意味での自由である。いわば、カントにおいては、自己は、反省をとおしてひたすら内部へと求心することによって確立されるものであるのにたいして、ここでは、内部という自己に特有の空間は存在せず、「わたし」は、社会関係という外部に拡散することによってしか「わたし」でありえないのである。

このような発想にたいしては、もちろん多くの批判が提起されている。前論文の最後のところで、批判のひとつを挙げ、それにたいする回答を今後の課題とした。その批判とは、つまり、役割という仮面をとおしてか他者を理解できないとしたならば、その当の人間の人格に触

れることは不可能となるのではないか、という疑問である。とくに、ゴフマンの場合には、演技という側面から役割関係が扱われているので、役割を引き受け、それを演ずることは、当人の外的印象を操作する手段でしかないと断定されることにもなる。

3 演劇モデル批判(1)

— 詐欺としての行為 —

演劇モデル批判を論ずるに先だって、まず注意しておかなければならないことがある。それは役割理論一般におけるゴフマンの特殊な位置についてである。前論文では、役割理論とゴフマンの演劇的アプローチのあいだの論理的関係について、考慮が十分であったとはいえない。それらの批判は、演劇的アプローチへの批判を、役割理論一般へと直接に連続させていることが多い。しかし、はたしてこうした批判の仕方は有効であるといえるのかどうか。つまり、その両者は、一体のものであると考えるべきなのか。むしろ、その両者の関係は、それぞれ論理的に独立していると考えべきではないのだろうか。つまり、役割という概念は、演技を論理的に含意するのか、という問題である。もし、それにたいして否定的に答えられるとするならば、ゴフマンへの批判が、役割理論一般にたいしては当てはまらないということになるのである。

しかも、ゴフマン批判は多くの場合、かれの初期の著作である『行為と演技』(1956、原題では『日常生活における自己表現』)⁽⁸⁾にもっぱら焦点が合わせられ、そのみを批判の材料とすることが多い。この著作では、他者を意識し、他者にあたえる影響を考慮した役割遂行、印象操作の演技が中心的な話題となっているために、そこから、行為する人間の本心はどこにあるのか、という疑問が提起されることになる。しかし、役割を遂行するということが、ただちに演技という意味を含むかどうかは、上にのべたように、早計に判断されないというべきである。

さて、ここでは、以上の注記を念頭におきながら、演劇モデルにたいする批判を紹介し、検討することにしよう。

トゥールミンは、その論文「規則と人間行為の理解にたいするその意味」⁽⁹⁾のなかで、ふたつの観点からゴフマンおよび役割理論に批判を加えている。それを論ずる前に、かれの立場を概観しておくほうがよいだろう。

トゥールミンは、人間の行為、あるいは、そもそも「ひと」(person)という概念を説明するために、ある固定的な立場を設定することに反対する。たとえば、

ひと—行為—ところ—規則—合理性
もの—運動—物質—法則—因果性

というような二元論的な区別がある。この場合、「ひと」およびその「行為」は、「もの」と対照され、過度に単純化されている。かれによれば、この二者の区別は、いかなる文脈でも立てられる、ということはないのであって、さまざまな状況のなかで、両者は関係したり、また区別されたりする。したがって、その関係と相違とのあいだにある、両者の多様性を見るべきなのである。つまり、人間の行為は、1つや2つのタイプに分類されるのではなく、より複雑な秩序をもっており、かたや純粹に因果論的に説明できる文脈にのっていることもあれば、かたや高度に知的な規則遂行がある。このようにして、かれは、「規則の分類学」(taxonomy of rules)を構想する。

トゥールミンは、7つに行為のタイプを分類しているが、ここではその詳細は述べる必要がない。かれは、「しこたま飲んだ晩の翌朝は、一般的に、目が覚めると頭痛がして胃の具合がよくない」というような、合理性や意識には関係しない、ある規則性を示す現象から、「学ばれた規則性」(learned regularity), 「規則に支配された」(rule-governed), 「規則適合的」(rule-conforming), 「規則適用的」(rule-applying), 「規則にしたがう」(rule-following)

というような行為のパターンを分析し、最後に、高度に意識的で批判的な、つまり「自己制御的」(self-monitoring)な行為を挙げている。このタイプの行為は、知的な手続きの自己批判的な適用であって、これまでの多くの哲学者が、「意識」や「合理性」の原形とみなしてきたものであった。

これらは、因果的レベルから合理的レベルまでの発展の諸段階を示しているのであって、トゥールミンは、いわば発生的に行為を分類しているといえる。したがって、この分類の両端は、あきらかに対照され、その違いは明白であるけれども、それぞれの段階では、明確な一線が引かれ区別されるわけではない。

もしもこのように、人間の行為が多様なかたちで規則とかかわり、それぞれにある特徴を示すとするならば、ある種の行為を取り上げて、それを人間の行為の本質であるとし、それにしたがって人間(person)を理解することは、もはや意味を失うことになる。トゥールミンにしたがえば、演劇モデルの行為理解は、まさにこのタイプの誤りに陥っているのである。

具体的批判の第一の観点は、さきにも述べたような、演技という概念にまつわるものである。演劇モデルという言葉自体、操作的(manipulative)という印象、つまり、人間が相互に、熟慮したすえにある行動のパターンを採用しているという印象をあたえる。演技の意味は、普通の一般的な行為者が、自然に無意識的に行うことを、意識的に装うということにある。演劇モデルでは、俳優の演技と通常の行為者に共通する行為の構造にのみ注目し、その両者の違いが看過されるのである。現実には、われわれは、戦略的な意図で行為することがある。とくに政治的な場面で、あるいは大学の教授会などで、熟慮し効果をはかりながな議論をしようとすることもある。しかし、そうしたたぐいの行為を、通常の行為一般の範型とすることは誤解を招くであろう。たとえば、演劇上の役割は、一種の仮面をかぶるということの意味しているが、その役割を演ずる俳優のパーソナリティに

については、その仮面とは別に想定されるのが普通である。しかし、そうした類推が行為一般にまでおよぼされるとするならば、われわれは、つねに他者の行為の背後に、なんらかの熟慮、計画を想定せざるをえなくなり、果ては、欺かれるのではないかという猜疑心に脅かされかねない。他者の「本心」(real feelings)は、表面からはうかがいしれないものとなる。

そのとき、ある役割を演技するものが身に付ける仮面の背後に、どのような素顔がひかえているのか、仮面を取り去った後に、そのひと自身の自己が見えてこない、という問題がただちに引き起こされる。そうなれば、現実の人間の真正の行為と、詐欺師の偽りの行為とが区別できないことにもなるし、また極端な場合、トゥールミンもいうように、大衆幻覚は、現象的には、現実と区別できなくなってしまう。「演技するというような高度の概念を持ち出してきて、比較的低いレベルの行為を特徴づけようとするのは、ゴルフをプレーすることを、ゴルフをプレーしているようにみせかけられるということから説明しようとするようなもので、通常は行為とその模倣とのあいだの共通の構造に光を当てるであろうが、それ以上に押し付けられたなら、われわれをアイロニカルな逆転に駆り立てることになる」⁽¹⁰⁾。つまり、本来日常生活を前提し模倣する、寄生的な演技という概念が、逆に日常生活の前提となってしまうのである。

こうした問題は同時に、次の難点をも生み出す。

ひとつには、演技ないしゴフマンの言葉ではパフォーマンスは、つねにそれを見て取る観客を要求するが、日常生活のありかたは、演技の主体とその観客という二者によって構成されているのかどうかという問いが提起される。現実のコミュニケーションの場面で、劇場における観客という立場に身を置くということ、つまり、他者と対面し共通の文脈にはいりこみながら、その状況からしりぞき、相手を遠ざけ、いわば観察の対象にすることは、はたしてその状況において可能であろうか、という問題であ

る。たとえば、ある問題を解決しようと他者とともに(あるいは自己と)格闘しているときに、その格闘のありさまを同時に、あたかも映画でも見るようになっていけることができるとするならば、それはかなり、不自然な作為を要求するであろう。コミュニケーションの現場では、対話者同士は、前提を共有し、共通の目的に導かれていることが一般的であると考えられ、ある共通の枠組みに共属している。その場合、その状況を観察するとは、共通の基盤から離脱し、いわば外側に立たねばならないのであり、そうすれば、そのコミュニケーション行為は、それ自体としてもはや成立することはないであろう。

以上の批判を整理するならば、次の3点に要約できる。

- 1 行為を演技として把握する一元論
- 2 真正の自己という概念の欠落
- 3 コミュニケーション行為の歪曲

これらの批判は、ゴフマンの印象操作のパフォーマンスという行為把握に、当てはまるようにも思われる。しかし、それにはひとつの前提条件が必要である。つまり、ゴフマンが、その演劇的アプローチによって、人間の行為を普遍的に把握できると主張していたとするならば、である。ゴフマンの場合、時期によってさまざまに強調点の違いがあるということを考慮の外に置き、『日常生活の自己提示』に限定したとして、そのなかにそのような主張が含まれていると考えられるであろうか。

ある役割を自己演出して、対面状況における相手にたいして、ある特定の印象をあたえようとする、このようなパフォーマンスは、現実存在する。この著作は、日常生活におけるそうした側面に焦点をあて、通常「真面目に」受けとられている対面状況のなかに、いかに演技の要素が含まれているかを暴き出したものであった。ゴフマンは、その演劇的アプローチのさまざまな欠点を意識しながらも、生活自体が劇的に演ぜられているものであるとし、「正直で、

実があり、真面目なパフォーマンスはまともな世界に、人がすぐ想像するほどにはしっかりと結びついているものではない⁽¹¹⁾と述べていることから、行為を演技として把握する方向におおきく傾斜している、といえるだろう。

そうなれば、ゴフマンの少なくともこの著作にかんしては、上記の批判は妥当することになる。しかし、わたしが主張したいことは、役割という概念で行為を把握しようとする態度がただちにこの批判にさらされるとはかぎらないということである。先にも述べたように、役割遂行と演技とは、概念上等しいとは言えないからである。後者は、前者の一部分を占めているにすぎないのである。

対面状況のなかで、ある行為が一種の役割遂行として、さらには演技として解釈される場合もあるであろう。他者の行為の表面上の見せかけの背後に、それとは別の意図を推測せざるをえないこともある。とはいえ、そうした一種イデオロギー批判的な態度が、われわれの生活全体を覆っているというならば、それは明らかに誇張である。

しかし、日常において通常の場合、他者の行為を演技として解釈していないことは承認されるが、さらに、それをある役割の遂行として把握してもいけないのではなからうか。対面的状況において、真面目にある行為が遂行されているとき、もしその行為が役割遂行であると意識されているならば、ただちにその行為は、演技という概念と結びつく、あるいは結びつきやすくなるだろう。もちろん、その場合でも、ある行為が、誠実な役割遂行であると理解されることも可能である。しかしながら、コミュニケーションを行っている場合に、他者の行為ないし言動を、ある役割から理解するということ自体、一般的であるとはいえないだろう。つまり、現実の場面では、相互的行為のなかに、ただちに演技という要素を含めて考える必要がないばかりか、そこでは、役割という概念をも一般的に持ち出してくる必要はない。たしかに、日常的行為のなかに、演技という側面、あるいは役

割遂行という側面を見出すことはできるにしても、それを一般化してとらえることは、日常的意識では不自然であろう。

それでは、ある行為を特定の役割遂行であると把握する見方は、どこで成立するというべきなのか。それは、現実において人間が行うさまざまな行為の諸相をながめるという位置に立つ者、観察者に位置する者において成立する。行為を理解するためのモデルとして役割という概念を持ち出してくるのは、その立場にいる観察者である。現実には役割遂行として理解されていない行為であっても、観察者の立場からはそのように解釈することも可能である。

トゥールミンは、個人的行為が規則と結びついていない、と主張するのではない。かれの、役割概念にたいする批判の力点は、規則にしたがう行為の多様性を無視し、それを一元化して把握することにある。あらゆる行為が、一種の演技として理解されるところに問題があった。しかし、規則ないし規範が、行為を構成するのであるならば、それを類型化して「役割」として把握することを妨げる理由はないだろう。

このような発想においては、コミュニケーション行為の歪曲という非難は、ある程度免れることができる。というのは、現実の行為遂行自体は、そのまま保存されているのであって、役割理論は、その多様なありかたを、コミュニケーション行為を含めて解明しようとするものだからである。「ある程度」という限定を付したのは、この場合の理論が、あるいは、そのような役割概念を用いる分析が、現実の役割遂行からまったく離脱して、いわば天使の立場に立って、現実を見下ろすものではないし、それはまた不可能だからである。したがって世界全体にたいする視野を確保すること、現実の行為のすべてを役割関係によって記述することは、初めから断念されなければならない。

それは、日常の社会的行為を「役割遂行ゲーム」として把握する見方自体が、ある役割を担っており、一種の「役割遂行ゲーム」であることによる。つまり、そこには、自己が自己を理

解する、あるいは、自己が自己を規定するという自己関係的構造が、つねに付き纏うのであって、そのとき、先にものべたように、両者の自己が同一であるとされるならば、無限後退のパラドックスを生じざるをえない。したがって、観察という役割を引き受ける「役割遂行ゲーム」は、現実のなかにその根をもち、現実のそれから相対的に区別されるだけである。

しかし、以上によって暫定的にしる、役割理論がある程度位置づけられたと考えられるとしても、真正の自己は、役割遂行によっては構成できないのではないか。この問いは残るといえるだろう。この批判にたいしては、トゥールミンの他の批判を論ずる次節で合わせて考察したい。

4 演劇モデル批判 (2)

— 人間関係の個性性 —

われわれは、社会的行為を遂行するとき、自己の役割とそれにとりまわり規範をことさらにいつも意識して行為しているわけではない。現実の行為は、非常に複雑で多面的な状況のなかで、しかもある特定の個人を相手としており、その都度選択に迫られている、といったほうが当たっている。わたしがいま直面している状況は、特殊なものである、と考えるのが普通であろう。その状況が、ある類型に分類されたり、その類型化された状況において、ある規範にしたがった行為が要請されている、という場合があるにしても、特に、ある特定の個人と対面して、相互的にコミュニケーションしているときには、そうした発想はむしろ遠ざけられているだろう。

「わたしをあるタイプ（黒人、外国人、統計上の匿名の個人など）の学生として取り扱わないでもらいたい。神に誓って、わたしをひと（person）として扱ってくれ」という要求は、もっともである⁽¹²⁾。人間は、抽象的でステレオタイプのパターンにしたがって、相互に反応しているのではない、つまり、一般化された規則や役割のひとつの例として個人が存在してい

るのではない。こうした主張は、十分に理解できよう。個人は、それに特有の歴史、特徴、趣味をもっているのであって、それを一般化された役割におうじて取り扱うということと、ひとを充全なる一個の人格として理解することの違いは大きい。

要するに、この問題は、役割理論においてひとの個性性をどのように考えるかという問いに置き換えられるだろう。

役割概念が、個人をそれとして理解するというよりも、社会構造を把握することを目指しているということがある。したがって、それは、そもそも類型把握なのだ、ということはいえるだろう。しかし、ここではその種の弁明は考慮の外におくことにしよう。むしろ、ここでは、役割という発想が、人間理解と緊密に結び付いているという方向を取りたいと思う。

そのとき、まず第一に確認しておくべきことは、当然のことであるが、それぞれの体験は、それぞれの個人に帰属するものとして理解されているということである。それは、物体にある属性が付随するという事態とは、根本的に異なっている。自己の体験であるといいうるためには、それを自己のものとして認識し、意味づけているという前提がなければ不可能である。そこには、ある種反省による媒介がある。自己というありかたは、そのようにして自己に帰属させられる体験の複合体として見出されてゆくものであろう⁽¹³⁾。

このように考えられるならば、トゥールミンの規則多元主義は、それだけでは十分なものではない。たしかに、かれの言うように、行為の規則とのかかわりは多様であろう。しかし、人間は、その多様性を多様なままに放置しているのではない。どのような規則にもとづく行為であろうとも、人間は、その行為を自己の行為として自己に帰属させているからである。そのようにして初めて、行為が体験として意味をもちえるだろう。

そのとき、規則が意識されることはなくとも、ある体験がわたしのものとして意味づけら

れるということは、そこに何等かの規則があって可能となる。こうした事態を説明するために、ベックは次のような例を挙げている。善意でなにかプレゼントを贈るとする場合、もし、そうした行為が規則にしたがっているというなら、何か奇異な感じを与えるだろう。ある感情をプレゼントという形で表現しようとするとき、かれが規則にしたがってそうしている、ということには、普通ではない。しかし、その場合でも、自己の体験を組織するための規範が問われるのであり、それがあればこそ、わたしの行為が他者にとっても、理解できるものとなるのである。プレゼントをするという行為自体、社会的規則のなかに位置付けられ、ある役割を担うからこそ、自己にとっても、また他者にとっても意味ある行為として理解される。「表現の規範化 (Normalisierung) がなければ、わたしにとってわたし自身の感情、意欲も理解できるものとはならず、私の行為を規定できることはないだろう」⁽¹⁴⁾。

つまり、わたしの体験を構成すること自体が、一種の規則による類型化を要求している、ということになる。もちろん、わたしの体験とは、ある時間空間における一回限りのものであるかもしれない。しかし、そのこととは、規則にしたがっているという事態とは矛盾するものではない。むしろ、そうした体験の個別的な複合が、その特定の個人のアイデンティティを形成する、というべきである。また、そのような体験の複合によって、その個人の規範との関係のありかたが形成されてくる、といえよう。その関係は、いずれは役割の複合というかたちで把握されるものとなるだろう。ゴフマンの、

「自己の同時的な多元性」という概念も、そうした場面で意味が見出されてくるのではなからうか。個人というありかたは、規則や規範と隔絶しているのではない。わたしたちは、「言語ゲーム」、あるいは「役割遂行ゲーム」の多種多様な複合の遂行者として存在する。

註

- (1) S. F. ネーデル『社会構造の理論』(斎藤吉雄訳、恒星社厚生閣)、22頁以下参照。
- (2) たとえば、P. Winch, *The Idea of Science and Its Relation to Philosophy*, 1958. それに、橋爪大三郎『言語ゲームと社会理論』(勁草書房)など。
- (3) ネーデル、上掲書、37頁以下参照。
- (4) H. Arendt, *Vita Activa oder Vom tatigen Leben*. (邦訳『人間の条件』志水速雄訳、中央公論社)
- (5) L. W. Beck, *The Actor and The Spectator*.
- (6) 小松恵一「演劇モデルによる行為理解(1)」、『仙台大学紀要』第22集(1991)
- (7) 小松恵一「道徳法則と自由」、『思索』(東北大学哲学研究室)第15号
- (8) ゴフマン『行為と演技』(石黒毅訳、誠心書房)
- (9) S. Toulmin, *Rules and their Relevance for Understanding Human Behavior*, in: *Understanding Other Persons* (Oxford) 1974.
- (10) Toulmin, p. 210.
- (11) ゴフマン、上掲書、83頁
- (12) Toulmin, p. 212.
- (13) 黒田亘『知識と行為』(東京大学出版局)104頁以下参照。
- (14) Beck, p. 114.

Zur Kritik an der Rollentheorie

Keiichi KOMATSU

Der Begriff der Rolle hängt zwar eng mit dem der Regel zusammen, aber kann vom letzteren in seinem begrifflichen Umfang unterschieden werden. Denn die sich auf der Rolle gründende Handlung weist nicht nur auf ihre Regel hin, sondern auch notwendig auf ihr Subjekt, nämlich auf die eine Rolle spielende Person. Daher muß eine Rollentheorie zwei Aspekte, mit denen sie erst ihren Inhalt empfängt, berücksichtigen.

Damit konzentriert sich die Argumentation gegen das dramaturgische Modell, das den Rollenbegriff zum seinen Hauptgegenstand hat, auf seine Auffassungen von Regel und Subjekt. Hier in diesem Aufsatz nehme ich S. Toulmins kritische Beurteilung zum Goffmans Standpunkt auf, die über die hauptsächlichsten Streitpunkte von Rollentheorie umfassend diskutiert.

Toulmins Kritik läßt sich in den folgenden drei Punkten zusammenfassen.

- 1 eindimensionale Auffassung von Handlungen als Performanz, die wirklich auf mannigfaltigen Regeln beruhen.
- 2 das notwendige Fehlen des Begriffs des echten Ich.
- 3 Verstellung kommunikativer Handlungen.

Auf diese drei Punkte der Kritik möchte ich, auf L. W. Becks 'The Actor and the Spectator' erwähnend, antworten. Dabei betont wird, daß das Verständnis der Handlungen erst durch Regelverstehen möglich wird. Daraus folgt die Unentbehrlichkeit der Typisierung der Handlungen.